

ジョヴァンニ・ピエトロ・ベッローリの 『芸術家列伝』再考

——動揺する17世紀イタリア文化の実情を支える求心的芸術観としての役割——

Giovanni Pietro Bellori's

Le vite de' pittori, scultori e architetti moderni

—A Testament of Cultural Anxiety and Centripetal System in 17th-Century Italy—

小 谷 訓 子

本稿は、1672年に出版されたジョヴァンニ・ピエトロ・ベッローリ（Giovanni Pietro Bellori 1613-1696）著の『芸術家列伝』（*Le vite de pittori, scultori e architetti moderni*, 1672）を取り上げ、それを社会的なコンテクストから理解することを目的とする。ジョルジオ・ヴァザーリ以降数多く出版された他の列伝に比べて、より学究的なアプローチを取るベッローリの『芸術家列伝』は、アンニバレ・カラッチの生涯から始まる。ベッローリによるとカラッチはラファエロの死以降、衰退の一途を辿ったイタリア芸術を救済する英雄である。ここでのイタリア芸術の衰退とは、その当時のイタリアに生まれた二つの異なる様式—不自然なマニエリスムと、過度の自然主義—によって生じた混乱であり、アンニバレ・カラッチはその混乱を治める救世主として描かれている。つまり、ベッローリの『芸術家列伝』におけるカラッチは、ヴァザーリの『列伝』におけるミケランジェロと類似した存在として描写されていると言えよう。

ヴァザーリの『列伝』が後世に与えた影響は、今ここで改めて言及する必要の無いほど多大なもので、ベッローリもヴァザーリに多くを学んだ追随者の一人で

ある。しかしながら、彼の『芸術家列伝』は、ヴァザーリが築き上げたプロトタイプから新たな展開を遂げていることも注目し得る事実である。例えば、ベッローリは、当時活動していた芸術家全員について著述するのではなく、議論するに値する12名だけを取り上げている。また彼は、作品制作における技法についての議論を一切省いており、その代替として自らの賞賛する「美」を説くことにページを割き、芸術論 *L'idea* を『芸術家列伝』の序論として設けている。これらの特徴を分析しながら本稿では、ベッローリの『芸術家列伝』が同時代の芸術家に関する体系的な記録を残すのではなく、芸術を理解するための新しい秩序を樹立することを目的としているのを明らかにする。そしてこの列伝は、ベッローリの個人的な思惑を表すだけでなく、当時文化的に動揺するイタリアが、求心的な存在や秩序を切望していたという社会的状況をも表すことを論じる。